

外魂観念について

高野まき子

靈魂の存在を特別の意識の中に置いて日々の生活を営んでいる人々はその職種、分野に関連している人々に限られてしまっているようではあるが、通常、我々の觀念の中に於いて完全に無關係のままではあり得ない。『あの世』への交流は民族的慣習の見地から一年を見渡してみただけでも何らかの形式や儀式、態度をもつて続けられていることがわかる。

逝った人を祭り、祖靈を語り、その靈魂の存在が一体どこであるのか全く不明であっても、『あの世のどこか』ということで、祖の代、親の代、子の代、そして孫の代へと靈魂の存在観はひきつがれ、信じられ、その家族及びその土地に根づいている。が、その『どこか』は民話、伝説の中に於いて潜在意識の消える睡眠中に身体から抜け出した魂だけが行って来れるところとなつて多くの国々で書かれ、読まれて来た。

この頁をかりて主に民話、伝説の中に読まれている『魂』を主体にして大ざっぱにはあるが話をすすめていきたい。

目覚めている人間が通常もつ根本的な心理的機能として、思考すること、感覚、感觸のあること、そして感情のうごき等があげられ、

これらが作用、及び反応している限りに於いてその人間が目覚めている状態にあることは身体的作動なしに感知可能なことである。仮りに夢をみるのがこの心理的根本能の『中斷』及び『機能停止』であつて潜在意識や意志の存在しない状態それ自体も又自我のある一部分そのものとするのなら現実でない、『ある世界』に於ける自己の魂の存在や体験は大きな意味をもち、役割を果たすことになる。

『睡眠中の人の靈魂はその身体からぬけ出し各所をさまようが、そのさまよっている所を睡眠中の者が夢にみているのであると信じられている。例えばブラジルやギアナのあるインディアンは深い眠りから覚めた時、その身体がずっと寢床の中で身動きもせず横たわっているのに靈魂は狩り、魚とり、木伐り等、何でも彼が夢みたことをするために رفتってきたのだと信じている。』

それに又、『未開民族の間では睡眠中の者を起こしてはいけないとされているのも眠っている間は靈魂が不在であつて、もしその靈魂の不在中に起こされると病氣にかかると信じられている。その他、睡眠中の人間の位置を移動すること、睡眠中の者の顔を塗ること等、抜け出ている魂がその人間の身体を再び見つけられなくなるとか、

塗られた顔をもつ睡眠中の身体に戻ることをためらい、その人間はそのまま死んでしまうとされ禁じられている』

〔魂の不在〕

(a) 睡眠時に於ける魂の不在

ルツツ・ローリツヒ (Lutz Rohrich) の見解によれば発達した西洋の国々の場合、夢と昔話(民話)は非現実的なものとして理解されていても、未開民族の夢経験はしばしば現実報告として伝えられている。ローリツヒの発表によると北西オーストラリア原住民の夢と現実とは、夢に似た像と実際とが彼らには同様の現実の段階となつて把握され、彼らにはある出来ごとがただ単なる夢だったものか、或いは又実際にあったものかわからなくなる場合が多い。彼らの毎日の生活が彼らの伝播能力、それに精神的な事象から成る社会的組織の結合に依存しているものであることを示しており、それらが『夢』として特徴づけられるのである。夢の意味は彼らの経験が夢をみている時と現実に見覚めていて自分が自分の意識下にある時と全く同価であることから由来している。

夢だか現実だか——と自問自答するものに代表的に中国の話で知られているものとして莊子の『胡蝶の夢』がある。うたた寝の夢の中で胡蝶となり楽しく自由に宙を舞いあるき、やがてふと目が覺めた莊子が一体自分が夢の中で胡蝶となつたのか、或いは楽しく宙を舞っていた蝶が夢の中で自分という人間になつていたのだろうか

——自分が胡蝶なのか、いや、胡蝶が自分なのか、という自問自答は、『夢が現実なのか、或いは現実が夢なのか』という問いにまでたどりつく。

多くの場合、夢をみている時は自分が現在夢をみているのだという潜在的意識はなく、目が覺めてはじめて、今のは夢だったのだ、自分はたつた今、夢をみたのだと自覺するのであるが、この場合、現世に身を置く人間が夢の中で自由な蝶をみたことによつてその自由さへのあこがれから現実錯誤の中で人間である自分を見おろしているものだが、別の解釈をもつてすれば、逃避不可能な現実の地上でつかの間のうたた寝の際、身体からぬけ出した魂が『蝶』となつて舞い、自分を見おろした——とも言えるかも知れない。

その他、中国の小説の中にも唐の沈既濟(七五〇—八〇頃)の『枕中記』や、李公佐の『南柯太守伝』、それに明の湯顯祖の戯曲である『南柯記』が同じような構想のものであるが、すでに知られているのでここには省くことにする。

眠っている間に魂が身体から抜け出して、ある体験をして再び身体に戻ってくる、そして(身体が)目覺めた時、その人間は夢をみたと言ふ。その見た夢たるは魂の体験どおりのものであった——というのが上記に挙げた著作の意図しているものである。

グリムの伝説の中にもそれに似た話で、『Der schlafende König』『眠れる王様』(Nr. 433)がある。

フランケン地方の王(その名をグントラムという)は森を散歩中疲れて付人のヒザを枕に眠ってしまった所、付人は王の口から小さなヘビが出ていき、小川を渡ろうとしていたのを見た。自分の剣を

橋にと、小川上に渡したところ、それを渡って向こう側の山へと姿を消した。しばらくしてヘビが同じ道を通って戻り、まだ眠っている王の口の中へと消えた時、王が目覚まして付人に、鉄の橋を渡ってから金に埋った山の中へと入って行った夢をみたと話して聞かせた。

この話はパウロス・ディアコノス(七二五―七九五)、アイメイヌそれにジイーゲベルト(修道僧であり年代学者であった)により伝えられており、グリム兄弟による伝説『Deutsche Sagen』(Darmstadt 1856)におさめられている。尚、グントラム王は五九三年に死んでいる。

この他にもグリム兄弟があつめた伝説の中で夢をモチーフにして話が展開しているものに、

- (1) 『Der schlafende Landesknecht』『眠れる農作男』(Nr. 461) (→Helimandus 246。一三世紀始め)
- (2) 『Das Mäuselein』『ネズミ嬢』(Nr. 248) (→Prätorius 246。一七世紀)
- (3) 『Der aussehende Rauch』『消えゆく煙』(Nr. 249) 等が知られている。

民話、伝説の中に於いて『彼岸の国』(あの世)での夢の展開状況というものは多くの場合、この地上での一生涯を経験し得る程に長いものであるが、それはこの俗世(人間の実社会)での時計が一時間すらもたない程の現実での短かさである。例えば『枕中記』では夢をみている主人公の年令がその夢の中で八〇才にまでもなる

が、彼が夢から覚めた時、寝入る前に火にかけたキビがまだ炊きあがっていない(位)に現実の時間はそれ程経過してはいなかった)のである。

ヴァント(W. Wundt)によると人間が息をひきとる瞬間、魂が肉体から離れる、それ故、魂たるは可動の姿のもの——例えば動物、鳥、殊に敏感に姿を消し得ることの可能なヘビ、トカゲ等が挙げられている。簡単に言うなら、その国柄、民族により取りあげられる鳥の種類が異ってはいいるが、鳥というのは不思議な呪いの力を持っているのみならず、天からの使いとして考えられていた。このことは鳥が人間よりもはるかに勝ったことが出来るのだと言う鳥のもつ可能性を大いに認めていたことにあるのだろう。

ドイツの迷信によれば、ヘビは祖霊の化身(具現化したもの)であつて、亡き人、或いは人間の魂そのものである。それ故、魂はヘビの形となつて生ける人間をある一定期間、しばしの間放置することが可能なのである。このようなヨーロッパのヘビに対する見解をもつてすれば『Der schlafende König』で何故ヘビに似た動物がグントラム王の口から出て川を越えていったか理解され得るのである。

日本にも『夢の蜂』及び、『だんぶり長者』その他これに似た類の昔話、伝説があり、人間の靈魂が蜂とかトンボの姿をかりて睡眠をとる人間の身体から出ていき、眠れる人間の知らぬ場所様々な体験をして再び身体に戻るものであるが、この場合、蜂やトンボはドイツの場合と異なり迷信から由来している畏怖や崇拜の対象として話にとりあげられているのではなく単なるあらずじのはこび役を果たしているのである。

(b) 危険回避のための魂の不在(自己の魂の意識的隔離)

“死”というものが永続的な魂の不在を意味するなら、“失神状態”或いは“睡眠”は一時的な魂の不在を意味する。

フレーザー(J. G. Frazer)によると魂が何らかの理由で——例えば事故、或いは力づくで——その身体から継続的に遠のかされた状態に置かれていてもその帰還をじやまされたままでいるとその人間は生命の根源を失ったまま死ぬようなことになる。そして又、人間が病気になったり、死んだりする場合は、その魂が人体外にあって邪魔されたり、損傷されたりしている時である。それ故、民話や伝説に於いて魂の安全確保は重大な事であった。そしてそれらのストーリーに於いてある人間の魂が他の人間、或いは他の生命ある存在に移された場合、その人間の運命は完全に魂が移ったそのものに依存することが出来る。そしてその人間が“我が魂”とか“我がいのち”と呼んでいる『もの』(対象物)が傷つけられたりすることもなく無事に存在している限り、その人間も又安全に存在しているのである。だがもしそれが傷つけられたり、破壊された場合は当然その魂の持主であった人間が苦しんだり、死に至ったりする。

インドゲルマンの民話や伝説の中で物語主題主人公が自分自身の魂をはるか遠い発見困難な場所に隠すという主題をもつものがあるというのもそうすることによって彼自身の命——『魂』、即ち、主人公自身——が敵からの危害をまぬがれる為で、その魂を自分の身体から取り出して自分だけの知る安全な秘密の場所に隠し、危険のなくなった時に再び自分の身体の中に取り戻すのである。というこ

とは、魂がある場所に隠されたまま安全にとどまっている限り、その人間自身が不死身の立場にとどまり得ることが出来て、例え敵が魂のぬけ出た主人公の肉体を発見し、破壊させたとしても全く意味がないのである。その人間の完全なる破壊はそれ故、その魂自体が征服され、滅ぼされた時である。即ち、ここで言わんとしている事は、見えざる魂自体の方が目に見える肉体の存在よりはるかに重要な役割を果たしているという事であろう。

ノルウェーにある説話で『身体に心臓のない巨人』(“vom Riesen, der sein Herz nicht bei sich hatte”)がよく知られているが、この類の民話が多くの国々に存在しているという事実はやはりもとに戻るようであるが、見えざる“魂の死”こそが、その目に触れもする(身体の)存在よりもはるかに重要視されている觀念がその昔から我々人間の心に存在し続けている事実をうらづけるものである。この話を一つの例にとれば賢い王女の誘導尋問によって国王の六人の息子を石にしまった巨人の心臓(魂)のありかを聞き出すことに成功する。

巨人いわく

『水のかなたのはるかに遠く

小島に建っている教会に

その教会に泉があつて

そこに カモが泳いでる

カモは タマゴをかかえて

タマゴの中には 我が魂(心臓)

そこに 隠してあるのさ』

教会にたどりついた残されたあと一人の王子がそのタマゴを見つけないきりグイと押すと巨人は大声で苦しみ叫ぶ。更に押し続けながら王子が巨人に石にされてしまった自分の兄弟の魔呪を解くように要求した後、最終的にそのタマゴを二つに押し割ってしまい、巨人は死ぬ。

このモチーフの主人公の魂がどこに隠されるのかはその国々まぢらまぢらである。例えばインド北部（ヒンドウスタン）、及びロシアの物語に於いては鳥の中やエニシダの茂み、『千夜一夜物語』に於いてはスズメの頭の中、マレーシアの物語では金の魚の中、カビール族、アイルランドでの話もタマゴの中——等に隠されるのであるが、その魂と隠し場所となる物体とは何らの相互関係はない。主人公自身がただ外敵から発見されにくい、ものゝを選び、そこに自分の魂を隠すというのも危険を逃れ魂の存在を他から発見されにくいようにするための手段（カムフラージュ）であった。それにしても魂の隠し場所として生命を生み出すタマゴを対象物に選んでいるということは『魂』即ち、『生命力』を思わせる興味の深いものである。

すでに述べたように眠っている間知らぬ間に魂がぬけ出ること、即ち魂の不在は身体の物体化、魂なき身体の存在は単なる物体の存在にしかすぎず、魂と身体の永遠の分離は即ち『死』に値する。早く言うなら、生きている——活動中か、或いは衰退途上か——は魂（別の言葉で表現するなら「精神（力）」の強弱度で判断もされ、見えざる生命力の根源であり、その魂の宿り場所（ありか）となっているのが身体である。ということとは身体が魂を動かしているのではなくして魂が身体に命令を下しているという事実は現実にも今の世

でも明らかなことである。

「悪霊畏怖と関連をもつ靈魂の觀念について」

墓地や人間の生活している区域にさまよっている死者の魂は害や病をひきおこしたり、不意をついて襲ったり、おびやかしたりする悪霊である。人間たちに悪いことをもたらそうとする悪霊の働きは復讐神（呪神）に似ている。それにしても何故様々な死者の靈魂がそのおちつくべき所を知らず、さまよわねばならないのか。不意をくらって強制的に死に至らせられた場合（古くは平将門の話がよく知られているが）その魂がのち、呪いの靈魂となり後世を生きる人々に飢饉、不作、伝染病をひきおこしたり、不死の病におとし入れたり、発狂させたり、という事はヴント（W. Wundt）の説明する『鬼神的存在としての魂が体外でその威力を発揮する』ことにも依っている。即ち、肉体は滅びても死にきれずにいる魂がより強いものとなって活動を開始するといふのである。

ヴントが著している悪霊畏怖についての觀念によれば、死者の腕手足を埋葬前にしっかりと縛りつけるということであるが、その際明らかに考えられることは死者の悪霊拘束ということにつながる。おり、これは即ち、縛ることによって悪霊が縛られた死体を決して置き去りにすることなく墓下にそのままどまつた状態にしておきたいという意図によるものである。これに似たような悪霊畏怖に關した觀念からきている慣習の一つで琉球ではおよそ一九三九—四〇年頃まで不自然な死に方をした人間の死がいを洗うこともせず棺桶

に入れることもせず、或いは橋のたもとに埋葬した。と
いうのも不自然な死に方をした者は不聖な魂にとりつかれると当時
信じられており、その魂が常に地下にとどまって地上に出て来ない
ようにと死がいは道行く人々にひんぱんに踏まれるような十字路や
橋のたもとに埋められた。このことはのち橋のそばや十字路に占者
が店を開きつけかけともなつた。

ヴントの説明する死体拘束やこの琉球の慣習は根本をたどるなら、
その死者を知る者たち、関係者たちが共通に持つであろう悪霊畏怖
に關して同様な觀念をもっていることを示している。それは人間の
世に災いや害をもたらそうとしている悪霊が死体を離脱することな
く墓に捕つたままであつて欲しいと望んでの行動であらう。我國で
もその昔不自然な死に方をした人間の身体を（常ではなかつたが）
切斷し埋葬したということだ。⁽¹³⁾ その例として中山太郎氏は九四〇年
に殺害された平将門を例にとつてゐる。氏の見解によると将門の埋
葬地が今日いろいろな場所に見受けられるのは彼の遺体が様々な場
所へ埋葬されるべく切斷されたからであるという。そして又更にこ
の切斷が意味するところのものは復讐靈（復讐神）への信仰から始
まっているもので不慮の死であるがために復讐靈が世に生きる人間た
ちにその恨みを晴らそうというものであるからそれを未然に防ぐが
ための切斷である。

終りにあつて伝説や信仰に於ける川や水について魂にとつての
『この世』、『あの世』と無關係でもなくはないので少しだけ書いて
みたいと思う。魂に關するヨーロッパ的解釋をもつてするとその背

景としてグリムの伝説『Der schlafende König』にあるように何故
へびのような動物が王の口から出て水の上を渡っていったか理解出
来よう。伝説や民話の世界のみならず宗教的分野に於いても川や水
は二つの異つた世界——この世（俗界）とあの世（彼岸）——の境
界を意味しているのみならず、『水』そのものが、それまでの状態の
ものを或いはあるものを洗い清める意味をもつことを疑わずして再
生（再誕生）の役割を果たす洗礼に、そして祭祀に用いられている。

この事實は民族、人種、宗教の種類をとうに越えた人間そのものの
心底に昔も今も不変のまま抱かれ続けられている川や水への觀念が
いかに各々似かよつて見つけられ、扱われてきたものかを示すもの
であらう。ドイツの民話、伝説の中に於いてもこれらの他にまだま
だ多くの水、川、泉、井戸等をくぐりぬけて、『別の世界』へ——と
いうモチーフのものや、それらをくぐりぬけて他の世界へ魂の移行
を筋としたものがいくつもある。それは又、生ける者と死んだ者の
世界とを境界づける役割をもつていたり、現実の世とは正反対の世
界であることが多いが、昔話や伝説での夢はこの二つの全く異つた
世界を川や水を越えて体験していくことによつて展開される場合が
多いということは、民話や伝説に託されているこの世に生きる人間
の意図が生きながらにして意識の上で潜在的にまつわりつくものか
ら勇敢に離れ逃れていつての『武勇』をせめて無意識の世界の中で
体験したいという願望があつての事かも知れない。

フリードリッヒ・ライエン（Friedrich von der Leyen）は多く
の昔話や伝説は『夢』から創り出され、夢に対する信仰及び夢を信
じることは伝説や昔話の發生、出発点につながると述べているが、⁽¹⁴⁾

ユング (C. G. Jung) をはじめとしたその研究門下生たちは、昔話や夢の中に『内的セラピー』の描写、叙述を見つめ研究を続けてくる。

Märchens”

(たかの・ちあき)

【註】

- (1) Frazer, James George, in: “Der Goldene Zweig” S. 265
- (2) (一) 同 2 Frazer
- (3) Röhrich, Lutz: “Märchen und Wirklichkeit” Wiesbaden 1964
- (4) (3) 同 2 Röhrich
- (5) Bächtold-Stäubli, Hanns: “Handwörterbücher zur deutschen Volkskunde” (Herausgegeben vom Verband deutscher Verein für Volkskunde) Berlin und Leipzig, 1927
- (6) 原田敏明『宗教と民俗』一九七〇
- (7) Frazer, James George; in: “Der Goldene Zweige”
- (8) 同(5) 同 2。
- (9) Wundt, Wilhelm; in: “Elemente der Völkerpsychologie” —Grundlinien einer psychologischen Entwicklungsgeschichte der Menschheit” Leipzig 1913
- (10) 注(4) 同 2。
- (11) 中山太郎『日本巫女史』一九三〇
- (12) 注(11) 同 2。
- (13) Von der Leyen, Friedrich; in: “Zur Entstehung des